



森林のふれあい

制作 林野庁近畿中国森林管理局
箕面森林ふれあい推進センター
作/絵 矢放 七海

ふゆやす しょうがくせい いえ あそ
冬休みのこと、小学生のハルヒはおばさんの家に遊びに来ていました。

「ねえ、おばさん。なんだかおばさんの家ってうちの家とふんいきがちがうね。」

「そう？ああ木材でできた物が多いからかもしれないわね。」



おがしき
昔

いま
家

「えっとそれは木でできた
ものってことだよね」

「そう、苗木を育てて切^きって使^{つか}うの。

もくざい おおむかし たてものかく
木材はずっと大昔から建物や家具とか

どうぐいろ つか
道具色んなものに使われているのよ」



おがしき
おがしき

いま
いま

「なんでそんなに使われているの？」

おばさんがにやりとして言いました。

「それはね。木にはみんなが使いたいと
思うすごいヒミツがあるからよ。」

「ヒミツ？どんな？」



「うーんどうお話しすればわかりやすいかしらね。」
おばさんは少し考えるとい言いました。



「そうだ、あなたが今からばいきんよりももっと小さくなったと想像そうぞうしてみて。」

「うーん、こんな感じかな…？うわばい菌きんでかっ！」



「そうそうそんな感じよ、
小さくなって机の上で木材のヒミツを探る、
そんな冒険ごっこをしてみるのはいかがでしょうか。
小さくなればいろんなことが見えるし、
きっとそのヒミツがわかると思うわ。」

「えっ、おもしろそう、やってみる！」
ハルヒは目を閉じてみました


Yahanashi



ハルヒはどんどんちい小さくなってお降りていきます。

つくえ机の上のちいさなちいさな大冒険の始まりです。

tahonashi



つくえ
机がだんだんと近づいてきました。

「ええー！ここ机じゃないみたい！
つくえ

ちい
小さな穴がたくさん空いてるよ、
あな
なんで?!」

おばさんが言いました。

「それはね、木が生きていたあかしのよ。」

「えっどう言うこと？」

「木は地面に生えているでしょ。」

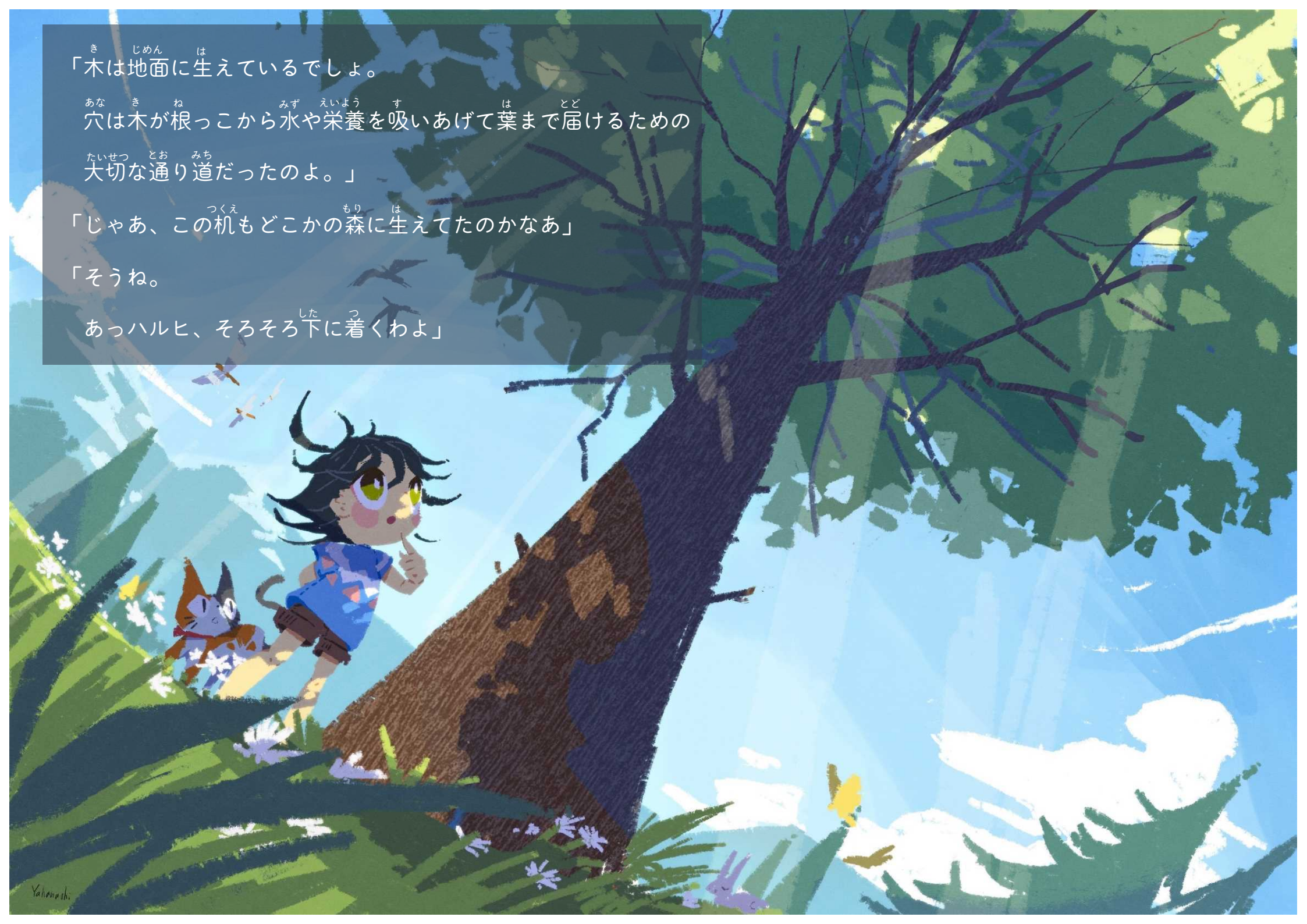
穴は木が根っこから水や栄養を吸いあげて葉まで届けるための

大切な通り道だったのよ。」

「じゃあ、この机もどこかの森に生えてたのかなあ」

「そうね。」

あっハルヒ、そろそろ下に着くわよ」



き じめん は
「木は地面に生えているでしょ。」

あな き ね みず えいよう す は とど
穴は木が根っこから水や栄養を吸いあげて葉まで届けるための

たいせつ とお みち
大切な通り道だったのよ。」

「じゃあ、この机もどこかの森に生えてたのかなあ」

「そうね。」

あっハルヒ、そろそろ下したに着くわよ」

みず
水と
えいよう





つくえ お た
ハルヒは机に降り立ちました。

ポヨン！


やわら
「えっなんか柔らかい！」

もくざい あな
「そうね、木材は穴がたわむことで、

はたら
クッションみたいな働きをするの。

いえ がっこう ゆか もくざい つか おお
だから家や学校の床とか木材が使われることが多いのよ。」


Yahanash ひろ つくえ うえ ある
ハルヒは広い机の上をはずむように歩きだしました。



しばらく机^{つくえ}を歩いていくと目のま^めえを

おお おお 大きな大きなスプーンが立^たちふさがりました。

「わあ、ぎんいろ^{ぎんいろ}の橋^{はし}みたい！」



ハルヒはスプーンの上^{うえ}によじ登^{のぼ}ってみました。

「あれ？木^きの机^{つくえ}を触^{さわ}った時^{とき}より手足^{てあし}が冷^{つめ}たい気^きがする！

どうして？」

ハルヒはびっくりしました。

「木^きにはね、鉄^{てつ}に比^{くら}べて触^{さわ}った時^{とき}の冷^{つめ}たさを和^{やわ}らげてくれる
ヒミツがあるのよ。」

「あっ、そういえば机^{つくえ}の鉄^{てつ}のところはひんやりするけど、
木^きのところはひやっとしなかったかも・・・くしゅん！」

寒^{さむ}くなってきたハルヒはスプーンの上^{うえ}をかけ出^だしました。

ハルヒは先^{さき}まで来ると

スプーンを滑^{すべ}り大^{おお}きくジャンプして

高^{たか}く跳^とびました。



そのまま木^きの穴^{あな}の中^{なか}へ。


ヒューっポ^{はい}ンっと入ります。

あな すべ なか めいろ
穴を滑りおると、中はまるで迷路のよう。

「わあ、ここに水が通ってたのかなあ」

さあ、あな すす
穴をつたって進んでいきましょう。






すこ すす 少し進んで、ハルヒはすわるのにちょうどいい場所を見つめました。

「おばさん、そういえばさっきから良い香りがするんだけど。」

もくざい かお ひと ここち ねむ 「木材の香りね、人をリラックスさせたり心地よく眠れるようにしてくれるヒミツがあるのよ。」

かお つつ すこ ねむ ハルヒは香りに包まれて少し眠りにつきました。



げんき つくえ ひょうめん で
元気になったハルヒは机の表面にまた出てきました。

「あっ、おばさんの手が見える！おばさーん、ヒミツたくさんわかったよー！」

はし
ハルヒは走りだしました。


そのときです。



ばい菌^{きん}が上^{うえ}からやってきました。

「どうしよう！あともうちょっとなのに・・・！」

「落ちついてハルビ、ばい菌^{きん}に木材^{もくざい}の香り^{かお}をあてるのよ」



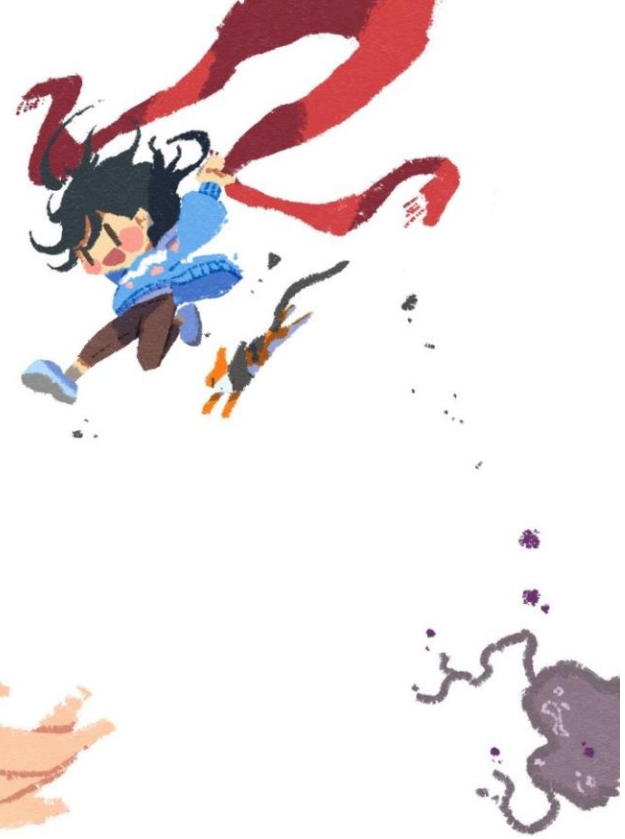
ハルヒはジャンプして^{かお}香りを^{きん}ばい菌にあてました。

ばい菌はとても^{いや}嫌がって^に逃げようとしています。

「やったあ！」


「ハルヒえらい！^{もくざい}ばい菌は^{かお}木材の^{いや}香りを嫌がるから、
^{きん}ばい菌を^{ふせ}防いでくれるヒミツもあるのよ。」

あたふたしているばいきんを踏み台にして
ハルヒは高く跳び上がりました。



「ただいまー！」





ぼうけん たの もくざい
「冒険ごっこ楽しかったー！木材のヒミツよくわかったよ。」

つくえ ね
ハルヒは机に寝そべってみました。

ぼうけん と き かお
ほんのり冒険の時のあの香りがしました。

おわり

